

## 史経鵬氏の発表論文に対するコメント

河由真\* (韓国 金剛大学校)

### 【論文の意義】

史経鵬先生の「竺道生の頓悟成仏説と仏性との関係」は、論者の2011年度の博士学位論文を基盤とするものであり、竺道生に関する中国の学界の最新の研究成果の紹介であるという点で大きな意義があります。今後、私を初めとする中国初期仏教研究者にとって大いに役立つものだと思います。

また竺道生の仏性思想は、金剛大学校仏教文化研究所 HK 事業団の核心アジェンダである、中国仏教の仏性および如来蔵思想の初期形成過程に関する研究において、出発点の位置に立つ極めて重要な思想家であり、また、重要な研究対象であるといえます。このような点で、史経鵬先生の論文は、本国際学術大会の参加者がともに精読し、その内容を検討するに値するものだと思います。

方法論の側面から検討すると、中国初期仏教の研究では、資料が完全に残っていないことが多いことから、歴史的な考証の裏づけが必要ですが、本論文は、この点に着目して、竺道生の仏性論に対して、仏教史学的な立場から厳密な考証を試みています。ある思想家の代表的な思想が形成され成熟していく過程を、歴史的な軌跡にしたがって追跡し再構成する試みは極めて注目されます。

また、これに基づいて彼の仏性思想と頓悟思想との関係を論理的、立体的に鳥瞰しているという点で、歴史的な脈絡と思想的な脈絡とが結合した優れた研究成果の一つと言えます。

ただ、いくつかの点については仔細に検討する必要を感じましたので、次の何点かにしぼって質問させていただきたいと思います。

---

\* 하유진 (ハ・ユジン)。金剛大学校仏教文化研究所 HK 研究教授。

## 【問題点】

1. まず眼に付くのは、現代の学者の仏性論に関する見解を議論の展開に組み込んでいる点です。代表的なものとしては、導入部を始めとして論文の処々で Whalen Lai 氏の主張を積極的に検討、批判していますが、彼は道生の仏性思想が小乗系の經典や廬山慧遠と関連が深いと主張しています。ところで、現存する道生の注釈はすべて大乘經典に関するものであり、これらの注釈の中から小乗毘曇学との関連を探ろうとする点で、容易ならざる試みに思えます。

また、道生が廬山慧遠とともに小乗毘曇学を勉強したという記録が残っています。慧遠が毘曇学に心酔し、これに基づいて自身の思想を展開したこともやはり事実ですが、ここからすぐに道生の思想が毘曇学、あるいは慧遠の影響を受けたと断定するには、根拠が足りないように思います。

参考までに述べますと、道生は神我の概念を中心とした慧遠の有我説を徹底して批判したうえで、大乘の空思想に立脚して仏性論を建立したとされていますが、この点は道生が慧遠との間に一定の思想的な距離を置いたことを意味すると思います。

以上のように、既存の研究成果は、主として道生の思想と般若系の經典、および中国の伝統哲学との関連を論ずる場合が多いにも拘わらず、論者が小乗系の經典との関連の有無に特に注目した理由について意見を伺いたいと思います。あわせて中国初期仏教と小乗仏教との関連を研究している現代中国の仏教学者を紹介していただければと思います。

2. 論者は論文の第1章で、道生の頓悟説に対する慧遠と劉虯の立場の相違を論じ、第4章でもう一度、二つの立場の間の共通点と相違点とを整理していますが、両者の共通点よりも相違点に注目する理由を明らかにしていただきたいと思います。

また、第4章では、漸修を排斥し、徹底して頓悟だけを擁護する劉虯の立場を、道生の思想の比較的正确な理解であると述べた後に、頓悟説の理論的な基礎を空理と仏性と見る慧遠の立場が、道生の頓悟説が持っていた歴史的な側面をよく反映していると述べておられます。このように論者は、漸修と頓悟については、頓悟から漸修へ移行してゆく道生の頓悟説の歴史的発展過程を無視して、ひたすら頓悟だけを強調している一方で、道生の頓悟説の理論的基礎が空理から仏性へ移行してゆく歴史的発展過程は積極的に認めています。その理由をお尋ねしたいと思います。

3. 第2番目の質問と関連して、論者は、余日昌氏や金榮鎬氏などが主張した、道生の頓悟説に対する頓と漸との調和と融合の観点を批判し、道生がただ頓だけを強調したと主張していますが、これに関してもう少し補足的な説明をお願いしたいと思います。参考までに述べさせていただきますと、評者は道生が注釈の処々において頓と漸とを併せて論じたという点から、道生が頓を主とはするが、その中で漸を排斥はしなかったという趣旨の論文(2011)を發表したことがあります。

これに関連して論者は第3章で、衆生の機根と「理之一極」との間の矛盾により、道生の頓悟説に理論的な欠陥が存在するようになったと述べておられますが、論者の研究では、道生の頓悟説に内在する論理的な矛盾は完全に解消されたと見てよいかどうか、お尋ねしたいと思います。

4. 論者は、論文の第3章で『涅槃經』の翻訳と道生の仏性論、および頓悟説の展開との関係について、いくつかの可能性を示しながら、道生が『泥洹經』に触れた時期が418-430年の間であると推定しています。また、論文の第1章では『大般涅槃經集解』の道生注が、少なくとも430年以後に形成されたであろうと推定しています。ところが一方で論者は、道生の『涅槃經』注釈が六卷本『泥洹經』に基づくものであるか、北本『大般涅槃經』に基づくものであるかは確定できないと述べておられます。そうであれば、このように具体的な時期を提示した理由をお教えいただきたいと思います。参考までに、『涅槃經』の翻訳や道生の頓悟説と関連する歴史的事件を種々の資料によって年代順に整理してみると、次のようになります。

418年	六卷本『大般泥洹經』翻訳(翻訳者:東晋 法顕)
421年	四十卷本『大般涅槃經』(北本)翻訳(翻訳者:北凉 曇無讖)
418-423年	竺道生『頓悟成仏義』撰述
422-423年	謝靈運『弁宗論』撰述
430年(元嘉7年)	四十卷本『大般涅槃經』(北本)が南方に紹介される
430-433年	三十六卷本『大般涅槃經』(南本)修治開始(修治者:慧嚴、慧観、謝靈運など)
433年	謝靈運死去
434年(元嘉11年)	竺道生死去

(翻訳担当:佐藤厚)